
超 不自然研究所

玉響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超 不自然研究所

【Nコード】

N8804M

【作者名】

玉響

【あらすじ】

この人間界でおこる様々な不思議で不可解な事件、それは人間以外のものがかわっているかもしれません。「超不自然研究所」はそんな事件専門の機関です。研究員たちはもちろんその道のプロなのでご安心を。

そんな、研究所のお話を、させていただきます。

その壱 新人研究員

カチ、「出勤ー8：50」

（今時、こんなやり方ほんと古いとこだな）と思いながら、「タイムカード」にうたれた数字を見て、夜は微笑んだ。

「やった！ちょうどいい時」

「なにがちょうどだ！出勤時間は8時半だぞ！」

奥のデスクにいた、この部屋のボス「室長」こと谷岡礼二は、呆れたように言った。

昨日も報告書とかで徹夜だったのだろう。眼鏡をはずし、眼をおさえていた。ただでさえ、細面な顔が最近ではいっそう細く見える。

その時、夜の後ろから、誰かが走ってくる音が聞こえてき、室長は大きいため息をついた。

バン！！といきおいよく扉があき、銀に近い金髪の男があわてて入り、タイムカードを打った

「やりい。間に合った」

「全然まにあってない！

まったく・・・お前たちはそろいもそろって・・・」

室長が再び深いため息をついて、いすに座り込むと、夜と金髪の男は顔を見合わせた。

「室長！こんな若作りなやつと一緒にするなよ！」

男がすかさず、夜を指差して軽口を言うと、夜もむっとして言葉を返した。

「なんですって！私は、若作りじゃなくて、実際10歳の体なの！！白夜^{びやくぜ}だって、本当は年寄りの犬のくせに」

「なんだとお！俺様を犬つころと一緒にするな。俺は、誇り高き九尾一族の狐だぞ！」

「どっちだって、本性は動物もときにはかわりないじゃない。」

二人がにらみあっていると、室長の咳払いが大きく響いた。
まずい・・・とふたりは顔を見合わせ黙り込んだ。これは、室長が怒る前触れだ・・・

「お前たちは！！『仕事』をしているという自覚があるのか！！毎回遅刻だぞ！」

「だって・・・朝は苦手で・・・『夜』って名前つくくらいだし・・・」

夜の言葉に、白夜も賛同し行け加えた。

「だいたいさあ、俺たちみたいな【異界】の仕事にこんなタイムカード制なんていみあるの？」

その言葉に室長は、完全に呆れ、切れた。

「お前たちにたいい加減なやつがいるから、タイムカード制にしたんだよ！」

さっさと仕事にとりかかれ！・・・もうすぐ、クライアントが来る。それまでにこの書類に目を通しておけ」

二人は、室長から投げ出された書類を受け取り、渋々書類に目を通した。

書類の一行目は、『超不自然研究所 御中』と書かれている。

「研究所ねえ・・・」

白夜はぼそとつぶやく。

ここ、『超不自然研究所』は、元は『冥界』など異界で請け負っていた人間以外のものや、人間界では不自然な現象を各界の調和を保つため問題解決する

仕事を、昨今はあまりにも多く人間がかかわっているケースが多いため、新しく人間界に造られた部署だ。

人間たちの依頼を直接請合うことが多く、そのため研究所の職員は見た目がより人間の姿をしたものが重要になる。もともと、正体は妖怪や冥界のものなど様々だ。

「とはいっても、ここの仕事の殆どが浮気調査やペット探し・・・ただの探偵事務所とかわりないわよね。」

夜が白夜の言葉にのってつぶやいた
「げ、またペットがらみだぜ。沼のほとりで行方不明になった犬がもどってきてから別犬のようになったて？それは単に悪いものでも食っただけじゃねえの？」

「最後まで読め！次に沼での行方不明者多数とかいてあるだろう」

二人は、あわてて書類に向き直り、読み始めた。

最後の文を見て、夜は突然顔が強張った。

「私、この仕事おけるわ」

「はあ？何急に言っただよ？いつも俺には仕事選ぶとかいつて
るくせに」

「とにかく、しない！」

そういうと、夜は部屋をでていった。

ぽかんとみていた白夜の後ろで、室長が声をあげた。

「あゝ、私としたことが・・・最初に気づくべきだった・・・」

「室長、何か問題があるのか？」

「この沼のあるK市は、かつて夜が今の姿になる前に存在していた
町なんだよ・・・」

室長の言葉に白夜の表情も陰しくなり、無言になった。

【はじまり】

「K市か・・・」

夜は、懐かしさと哀しさが入り交じった複雑な心境だった。

「みんな、どうしてるかな・・・」

会ってみたい気持ちもあった。たとえ、夜を・・・かつて、『中里
由緒』くなかざと ゆい>だった人間を誰も知らなくても・・・

5年前・・・

由緒は、毎日、平凡な生活をおくっていた。入社してから4年すぎ、周りの友人たちは婚活に取り組み最近の話題は、その話で盛り上がっていた。

「由緒、今日合コン行かない？相手、かなりいいらしいよ」

一番最後に更衣室にはいると、同僚がすぐに声をかけてきた。

「うーん、せっかくだけど、やめとくわ。」

「え、せっかく由緒のために一人増やしたのに。最近つきあい悪い」

「ごめんね、なんか、体がだるくって、早く帰って休みたいの」

由緒が、あやまると「そっか」と返事をして合コンにいくメンバーたちは、いそいそと身支度していた。

「調子わるいんなら、仕方ないね。また誘っわ」

「ありがと」

由緒は、軽くお礼をいい、足早に家まで帰った。

このところ、妙に体がだるい。それも、あの夢をみはじめてからだ。あの、毎晩見る変な夢・・・

夢は、いつも自分が横たわり、「臨終」をむかえつつある場面から始まる。息もたえだえになっていく中、その周りを取り囲むように様々な年齢の男女5、6人が白い服を身にまとい私をのぞきこむ。

そして、「あと少し・・・」といいながら笑っている。はじめは、ただ笑っていただけなのが、少しずつ手がのびてきて、死につくある私をつかもうとする。それが、日をおうごとに近づきそらとにも、現実の世界では体がどんどんだるくなってきていた。

「ただの夢だね・・・」

そう思おうとしつつ、眠る前はこわかった。いつか本当に現実にな

るんじゃないかと思ってしまう。

今日は、一段と体がだるい。由緒は、かたく目を閉じ、横になった。夢が始まった。また、私はよこたわってる。もう呼吸する力ものこってない。「私」は死んでいた。

その時、突如のぞきこんでいたものたちが笑い出し、大声で叫んだ。「これで、やっと我が物となる！」

たくさんの手がのびてきた。そして、その手が私の身体に触れた瞬間。由緒は全身にはしった激痛で目が覚めた。遠くのほうであの者たちの叫び声が聞こえたきがした。

目が覚めて、自分がちゃんと生きてることにほっとしつつも、身体はまだ痛くて起き上がれなかった。なんとか動く目であたりをみると、そこは見慣れた自分の部屋でおいっているものも何一つかわってはいない。なのになにか、違和感を覚えた。

（見え方がちがう・・・？）

部屋が広く見える気がした。そして、時計をみると明らかにまだ夜中のはずなのに驚くほどはつきり見える。暗いとわかってるのに、見えている。

少しずつ身体の痛みが消えて、由緒はなんとなく自分の手を見た。

その手は、確かに自分の手のはずなのに、まるで子供の手のように小さい。

「えっ」

驚いてベッドからとびおきると、急いで鏡をみた。

「うそ・・・」

鏡にうつっていた姿は、昨日までの由緒ではなく、子供の姿だった。自分の中の記憶をたどっておそらく10歳くらいの姿だろうか・・・。驚愕のあまり、頭が真っ白になった。これは、夢だろうか、現実でこんなのおこるわけがない。

呆然としたまま、時間ばかりが過ぎていく。

時計をみると、もう朝になっていた。

「あ・・そうだ、職場に電話しなきゃ。」

こんな姿では、仕事は無理だ・・由緒はおもわず自分のそんな行動を笑った。

（やっぱりこれはまだ夢なんだわ。こんなことがおきてるのに、職場に休む電話だなんて普通は考えられないもの）

しかし、職場に電話をすると思いもよらない答えが返ってきた

「どちらにおかけですか？中里という社員はおりませんが・・」

まさか、と思った。電話にでた社員はよく知っている名前の人だった。いじわるでいうような感じではない。

由緒はつぎに実家の家族や友人に電話をかけた。

しかし、答えはみんな同じ

「中里由緒という人は知らない。」

「じゃあ、私は誰？」

由緒は、もっている服のなかから一番小さめなものを選んで着替え、出かける準備をした。とにかく外にでて、直接どうなっているのか知りたかった。

しかし、それは新たなショックをうむのみだった。市役所や銀行までも中里由緒の痕跡がない。

仕方なく家にもどってみると、さっきまですんでいたはずの自分の家は、アパートごとなく空き地になっていた。近くを通りかかった人にたずねると、

ここは、もうずっと空き地だという。

由緒は、すむところももどる場所も失い途方にくれた。

わずかに手元にのこったお金でホテルにとまろうとしても、子供の

姿一人ではいれてもらえず逆に家出人とまちがわれて警察に通報されてしまう。

ただ、さまよい歩くしかなかった。どうしていいのかもわからない。その晩は、公園ですごした。夜なのに明るく見えるのは自分の目が、暗闇でもよくみえる目なんだと気がついた。

そして、由緒は、明らかに人とは違うものたちが人間にまぎれて動きまわるのも見えた。そのうちのいくらかは、由緒に見られているのに気がついて

にっと笑いかける者もいた。

次の日、由緒はまた自分の能力が人間ばなれしていることに気がついた。公園で元気がない猫に魚をかって与えてあげたとき、猫は突然話し出し、この少し

さきのビルの屋上にあるポンプ室なら雨風がしのげると教えてもらいついていった。猫についていくと、塀をとびこえ進んでいく。必死についていくうちに気がつけば、由緒も簡単に飛び越えていた。身体「がとても軽く、高いところでも平気でおりられた。ポンプ室のつくと猫は、自分は猫又という妖怪だとつげ、魚の礼をいって消えていった。

その日は、月がとてもきれいな夜だった。満月ということもあってか、様々な者たちが活気づいている。

ふと、気配を感じて後ろを振り返ると、金髪の男が立っていた。男は、息をきらし、一呼吸おいてからいきなり大声でどなった。

「中里由緒！ やつとみつけた！」

その名前を誰から呼ばれるのは随分「むかしのことのような気がする。

「私のこと・・・？」

「どうやら、自分自身の記憶も消していつているようだ・・・たいした自己防衛力だな。」

金髪の後ろからいつのまにか、もう一人、眼鏡をかけ黒いスーツをきた男が現れ金髪の男にはなしていた。

「あなた達はだれ？」

眼鏡男が、由緒にちかづき微笑んだ。

「はじめまして。私達は、『超不自然研究所』の者です。あなたを保護しに参りました。私達と一緒に来てもらえませんか？」

「保護・・・？」

由緒は、突然の言葉に不安しかなかった。

「はい。このままでは、あなたの身が危ないのです。中里由緒さん、どうか、私達と一緒に来てください」

「その名前はもう存在しません・・・私は、あなた達を知らないし、保護される覚えはありません。」

「これは失礼しました。私は、谷岡礼二という者です。そして、横にいる金髪のものが、白夜といいます。」

保護を依頼してきたのは、当研究所の上の者です。」

「上の者？」

「そうです。『冥界』というところをご存知ですか？私達は、その世界の命により、働いています。」

谷岡礼二は、あくまでもていねいな姿勢を崩さず丁寧に説明した。

そこへ、我慢しきれず、白夜が口をはさんだ。

「ちんたら言う時間はねえ！おい！お前、さっさと来い！はやくしないとやばいんだよ！」

礼二は、頭をかかえたため息をついた。

「でも・・・どこへいくの？」由緒はさらに不安な表情で聞いた。無理やり連れて行かれそうでこわかった。

「どこつて、それは・・・」白夜はちらと礼二を見た。どうやら白夜は知らないらしい。

礼二が再び何か言おうとしたが、白夜はさえぎって思いついたように言った。

「俺達の研究所に行くんだよ！今日からお前は、研究所の一員になるんだ！」

「お前、なにいつて・・・」

礼二があわてて止めにはいるのも聞かず、白夜は一瞬空をみたあと、由緒に言った。

「名前は、『月夜』だ。俺様の一字をやったんだ。感謝しろよ」

「月夜・・・？私の名前・・・？」

由緒は、身体の奥から何かあたたかいものが流れていくのを感じた。

「白夜！名をあたえるのがどういうことかわかっているのか！？」

礼二の声が、遠くで聞こえる。由緒は、月夜とちいさくつぶやき、自然と二人の方に手がのびた。

「一緒に、いきます。」

その時、身体から光があふれてくるのを、由緒は、・・・月夜は心地

よく感じていた。

後日、白夜は軽はずみなことをしたとして、礼二からも上からも、こつてりとしぼられた。

そして、「月夜」という名前は、美しすぎて似合わないと名前を「夜」に言い換え、夜はしばらく白夜に八つ当たりをされた。

あれから、5年・・・

毎日が、非日常的で、驚きの連続だった。だが、一人じゃない幸せな日々でもあった。

「やつぱり、ここにいやがった。」

屋上の階段をのぼりきったところで、白夜が声をかけてきた。

「こんな明るいうちからビルの屋上にたつて下を覗き込んでたら、自殺とまちがわれるぞ。」

「べつに・・・自殺なんかしないもん。」

白夜は、からかうようにふん、と鼻をならし夜の隣に立った。

「そんなときだけ子供になっても気持ち悪いだけだぞ」

「余計なお世話！なによ、からかいにきたの？」

不意に白夜は口をつぐみ、下の町を眺めた。白夜は、外見は22, 3歳くらいの青年で、切れ長の目のとてもきれいな顔立ちをしていた。朱色のピアスが嫌味なくにあっている。だまっていれば、本当にかっこいいのとおもいながら、夜はおもわず口にした。

「中身は、自己中、軽薄、女好き」

「なんだとお!？」すかさず白夜のにらみがとんだ

「・・・なあ、夜、この仕事本当にいいのか？」

「・・・何が？」

「お前が、こだわる気持ちはわかるが、俺は、行ったほうがいいと思う。」

夜はしたをむいて返事をしなかった。白夜は口は悪いが、いつも確信をついた事を言う。

「まだ知り合いが同じ時代に生きているうちに見たほうがいいぞ。・・・会いたいんだろ？」

白夜の言葉が重く夜の心に響いた。白夜は人ではない。九尾狐族だ。きつと人よりも途方もなくなぐ生きてその分人との別れも経験している。

夜は、涙をこらえながら、かすかにうなずいた。

白夜は、だまって、夜の頭をかるくなでた。

「どういうことですか？よりによって、k市の仕事をうちにもってくるとは・・・」

礼二は必死に苛立ちをこらえながら、電話の相手である、上司の言葉をまいった。

「は・・・？いえ・・・今も結果的には、白夜が名を与えたこよによつて、「契約」ができ、夜はここに籍をおくことはできていますか・・・」

それがいつまで、もちこたえられるか・・・」

夜は、あるものたちに狙われている。夜が敵につかまってしまったら、大変なことになる。なのに、上の者達は夜を守護することなく、こつして様子をきくだけだ。

「・・・わかりました。だは、今後も様子をみていきます・・・」
電話をきると、礼二は苛立ちを思い切りごみにぶつけ、投げた

「連中には、荷がおもすぎるんですよ。上とはいつでも所詮は中階級ですからね」

礼二がなげたごみを箒ではいて、部屋を掃除しながら、作業服をきた中年の男が笑って話しかけた。

「さとり、盗み聞きするなといつも言ってるだろう。」

「こりや失礼、聞こえちまったもので。」

さとりは、わるびれたようすもなく、さっさと部屋をあとにした。

時計はちょうど9：00をさしている。

礼二は、クライアントの対応の用意をととのえ、夜と白夜もいそいで研究室に入ってきた。

『超不自然研究所（一般課）』

受付時間 9：00～16：30

秘密厳守、人には説明できない不可解なこと、相談に応じます』

研究所、開館。

その壱 新人研究員（後書き）

話が長くなってしまうので、ここで一話にしました。

次回はいいよ調査開始です。さいごまで、楽しんで見てもらえたらうれしいです。

ありがとうございます。

パソコン初心者なので、不備などあるかとは思いますが、ごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8804m/>

超 不自然研究所

2010年10月28日04時36分発行